福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI
REPOSITORY

『玉勝間』の巻頭言に関する考察(後編)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 膽吹, 覚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8093

『玉勝間』の巻頭言に関する考察（後編）

膽吹　覚*

はじめに

本稿では、私稿「『玉勝間』の巻頭言に関する考察（前編）」（本誌第三号、平成二十五年一月刊）に引き続き、『玉勝間』巻八から巻十四までの巻頭言について巻ごとに考察し、最後に『玉勝間』の巻頭言について総合的な見解を述べてみたい。

8　巻八「萩の下葉」

萩の下葉　八

人はこず萩の下葉もかつちりて嵐は寒し秋の山ざと

はもじを重ねたる、いにしへの歌どもを見て、ふとおかしきふしにおぼえたるまゝに、われもいかでとよみ出たる也、きこえてやあらむ、聞えずやあらむ、われは聞えたりと思ふとも、人の見たらんには、いかゞあらん、きこえずやあらむ、しらずかし、

宣長が詠んだ「人はこず」の一首は、彼自身が歌の後に記している通り「はもじを重ねたる」歌である。具体的に指摘すると、「人は𠆢こず」と「嵐は𠆢寒し」である。「萩の下葉」に拠ると、宣長「は」文字を重ねて用いた古歌を見ていて、ふと自分もそうした歌が作りたくなって作ってみたのが、この「人はこず」の一首であるという。古い歌集を前にして、不図した思いつきから捻り出した一首であるから、宣長は「きこえてやあらむ、聞えずやあらむ」、或いは「われは聞えたりと思ふとも、人の見たらんには、いかゞあらん」と、自負と謙遜を繰り返し述べている。

一首の和歌に於いて係助詞「は」が重複して使用されるケースについて、宣長は『詞の玉緒』巻三「𠆢を重ぬる格くさ〳〵」（天明

*福井大学国際交流センター

五年刊）に於いて次のように述べている。

○はを重ぬる格くさ〳〵

古　二　ふるさととなりにしならの都にもいろはかはらず花はさきけり

同　四　いつはとはときはわかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりける

これらはたゞ何となく重なれる也。又一つの格有り。

古　四　里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

同　五　秋はきぬもみぢは宿にふりしきぬ道ふみ分てとふ人はなし

後　五　たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬ我身かなしも

新　五　人はこず風に木葉はちりはててよなく虫は声よわる也

右のたぐひ一つの格なり。又これとかれと相対へていふ有。

古　一　み山には松の雪だにきえなくにみやこはのべのわかなつみけり

同　人はいさこゝろもしらずふるさとは花ぞむかしのかににほひける

同　三　こゑはして涙は見えぬ郭公わがころもでのひづをからなん

拾十一　いかゞせん命はかぎり有物をこひはわすれず人はつれなし

右の内へみやまにはの歌と。へ声はしての歌とは。二つのはもじまさしく相対へり。へ人はいさの歌は。上のはは花と対ひ。下のはは対はず。へいかゞせんの歌は。上のはは下句と対ひ。下の二つのはは。前にあげたる一格のはなり。

又は二つば二つある歌

古　一　年ふればよはひはいいぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

「はを重ぬる格くさ〳〵」に於いて宣長は、「は」を重ねる用法を四種類に分類し、提示している。その第一は「たゞ何となく重なれる也」とあるとおり、一首中に「は」が重ねて用いられているが、そこに目的や効果は見られないタイプである。第二は並立で、同種同類を並べたものである。例えば「里はあれて人はふりにし」であれば、里は荒れて、住む人は年老いてしまったことを並立させて嘆いている。第三は宣長が「これとかれと相対へていふ也」と記している通り、対立の用法である。例えば「こゑはして涙は見えぬ」は、ホトトギスの声は聞こえるが涙は見えないと詠む。第四は一首の中に「は」が二回、「ば」が二回使われているタイプである。

ここであらためて宣長の「人はこず」の一首を見てみよう。初句に「人はこず」、そして第四句に「嵐は寒し」とある。この二つの「は」の用法を前掲の「は」を重ぬる格くさ〳〵」に照らし合わせてみると、第二の用法、すなわち並立であることが知られる。そのことに留意してこの歌を口語訳すると、我が家を訪れる人もいない。萩の花も散り、さらにその下葉までも一枚また一枚と散って、秋風が寒く身に染みる、となるであろう。また、この歌は「は」を重ぬる格くさ〳〵」で宣長の「人はこず」の歌と同じく、並立の用例として掲出されている『新古今和歌集』巻五収録の曽祢好忠の「人はこず」一首と共通点が認められる。好忠のその歌をあらためて左に掲げる。

だいしらず　　曽祢好忠

人はこず風に木のはは散りはてて夜な夜なむしはこゑよわるなり

（『新古今和歌集』巻五秋歌下、五三五）

両者はまず初句がともに「人はこず」である。次に「は」の用法がともに並立である。そして、この二首はともに、誰も自宅を訪ねて来ない寂しさを深まりゆく秋の景物に重ねて歌われている。こうした共通点から見て、宣長の「人はこず」の歌は好忠の「人はこず」の歌を踏まえて作られた可能性が考えられてよいだろう。

さて、宣長の「人はこず」の歌の第四句に詠まれ、巻八の巻名ともなっている「萩の下葉」は『万葉集』や勅撰集にその用例を見ることができる。『万葉集』及び勅撰集に詠まれた「萩の下葉」を見ると、そのすべてが下葉の黄葉（葉の色の変化）を詠んだものである。本稿ではその一例として左記の五首を挙げておく。

詠黄葉

比日之暁露吾屋前之芽子乃下葉者色付尓家里
（コノコロノアカツキツユニワガヤドノハギノシタバハイロヅキニケリ）

（『万葉集』巻第十秋雑歌、二一八六）

題しらず　　よみ人しらず

夜をさむみ衣かりがねなくなへに萩のしたばもうつろひにけり

このうたは、ある人のいはく、柿本の人まろがなりと

（『古今和歌集』巻第四秋歌上、二一一）

あひしりて侍りける女のあだなたちて侍りければ、ひさしくとぶらはざりけり、八月ばかりに女のもとよりなどかいとつれなきといひおこせて侍りければ　　よみ人しらず

白露のうへはつれなくおきゐつつ萩のしたばの色をこそ見れ

（『後撰和歌集』巻第六秋中、二八五）

延喜御時の御屏風に　　つらゆき

風さむみわがから衣うつ時ぞ萩のしたばもいろまさりける

（『拾遺和歌集』巻第三秋、一八七）

題しらず　　相模

色かはる萩のした葉をみてもまづ人の心の秋ぞしらるる

（『新古今和歌集』巻第十五恋歌五、一三五三）

これに対して宣長の「人はこず」の歌は、「萩の下葉もかつちりて」とある。宣長は「萩の下葉」が一枚また一枚と散る様子を詠んでいる。「萩の下葉」が散る様子を詠んだ歌は、右に掲げたように『万葉集』及び勅撰集では見られないものである。宣長が巻頭言の「萩の下葉」で「きこえてやあらむ、聞えずやあらむ、われは聞えたりと思ふとも、人の見たらんには、いかゞあらん、きこえずやあらむ、しらずかし」と繰り返し、自作の和歌への自負とも謙遜ともとれる言葉を繰り返しているのは、自作の和歌に於ける「萩の下葉」の詠み方が古歌（『万葉集』や勅撰集）の用例と合わないことを踏まえてのことではなかったろうか。宣長の「人はこず」の歌はわかりやすいものである。この歌に宣長が繰り返し述べるような不安な材料があるとすれば、それは「萩の下葉もかつちりて」の「ちりて」に求められるのではないだろうかと私は考えている。なお、宣長の「人はこず」の歌は『鈴屋集』並びに『石上稿』には収録されていない。

9　巻九「花の雪」

花の雪　九

やよひのころ、あるところにて、さくらの花の、木本にちりけるを見て、一とせよし野にものせし時も、おほくはかやうにこそ、散ぬるほどなりしかと、ふと思ひ出られけるまゝに、

ふみ分けし昔恋しきみよしのの山つくらばや花の白雪

かきあつめて、例の巻の名としつ、雪の山のつくられし事は、物に見えたり、

三月ごろ、ある所で、桜の花がその木のもとに散り敷いている光景を見て、ある年に吉野山に花見に出かけた時も、多くはこのように散ってしまっていたと、ふと思い出されたので、「ふみ分けし」の一首を詠んだ。かき集めてこの歌から「花の雪」をこの巻の名とした。雪の山を作られたことは書物に記されている。以上が「花の雪」の大意である。

宣長は「花の雪」に「一とせよし野にものせし時も、おほくはかやうにこそ、散ぬるほどなりしか」と記している。この「一とせよし野にものせし時」はいつのことであろうか。

宣長はその生涯に四回、吉野を訪れている。宣長が吉野を旅した最初は、寛保二年（一七四二）七月、宣長十三歳の時であった。この時、宣長は手代二人をともとして、吉野水分神社や大峰山などに参詣している。二回目は明和九年（一七七二）三月五日から同十四日まで、宣長は友人五人を伴って初瀬・吉野・大和方面を旅行している。この旅を記したものが『菅笠日記』（寛政七年刊）である。明和九年は、宣長は四十三歳である。三回目は寛政六年

（一七九四）十月、当時六十五歳であった宣長は紀州に向かう途中で、龍門の滝に立ち寄り、水分神社を遥拝している。最後は寛政十一年（一七九九）二月、紀州から松坂への帰路に吉野を訪れて「よし野の歌」を詠み、それは後に「吉野百首」として『鈴屋集』に収録されている。寛政十一年は、宣長は七十歳の年に当たる。以上の四回の旅行の中で、いずれが「花の雪」に記された「一とせよし野にものせし時」にあたるか考えてみると、まず寛保二年に吉野を訪れたのは七月であり、寛政六年のそれは十月であったから、ともに桜の季節ではない。次に、『著述書上木覚』によると、寛政十年（一七九八）四月十二日、『玉勝間』巻七・八・九の板下が京都の本屋に遣わされているので、寛政十一年の旅は「花の雪」執筆以後である。ゆえに、「花の雪」に記された「一とせよし野にものせし時」は、明和九年の吉野旅行を指すと考えられる。

明和九年三月八日、宣長一行は桜咲く吉野山を訪れた。しかし、残念ながら、その年の吉野の桜は既に盛りを過ぎていた。『菅笠日記』には、次のように記されている。

こゝより見わたすところを。一目千本（ヒトメセンボン）とかいひて。大かたよし野のうちにも。桜のおほかるかぎりとぞいふなる。げにさも有（リ）ぬべく見ゆる所なるを。たれてふをこの者（モノ）か。さるいやしげなる名をつけんと。いと心づきなし。花は大かた盛（リ）すぎて。今は散残（リ）りたる梢どもぞ。むらぎえたる雪のおもかげして。所々に見えたる。そも〳〵此山は。春立る日より。六十五日にあたるころほひなん。いづれのとしもさかりなると。世にはいふめれど。又わが国人（クニビト）の。きて見つるどもに。とひしには。かのあたりのさかりの程を見て。こゝに物すれば。よきほどぞと。これもかれもいひしまゝに。其程うかゞひつけて。いで立（タチ）しもしるく。道すがらとひつゝこしにも。よきほどならんと。おほくはいひつる中（ナカ）に。まだしからんとこそ。いひし人も有しか。かくさかり過（スギ）たらんとは。かけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしくとひきけば。この二月（キサラギ）のつごもりがた。いとあたゝかなりしけにや。例（レイ）の年のほどよりも。ことしはいとはやく咲出侍りつるを。いにし三日四日ばかりにや。さかりとはまうすべかりけん。そも雨しげく。風ふきなど（ン）せし程に。まことに盛（リ）と申（シ）つべきころも侍らぬやうにてなん。うつろひ侍りにし。とかたるをきけば。其とし〳〵の寒（サム）さぬるさにしたがひて。おそくもとくもあることにて。かならずそのほどと。かねては此里人も。えさだめぬわざにぞ有ける。

吉野の桜は立春から数えて六十五日目にあたる頃に花盛りを迎えると言われていた。そこで宣長一行も、それに合わせて松坂を出発した。しかし、この年は二月末ごろから暖かかったので、例年よりも早く三月三日、四日ごろに盛りを迎えてしまっていた。八日に吉野に入った宣長は、盛りを少し過ぎた桜花を目にしたのである。

『玉勝間』巻九「花の雪」に記されている宣長の「ふみ分し」の一首は、その詞書に拠ると、明和九年三月に吉野山で見た桜を「ふと思ひ出られけるまゝに」詠んだ歌であるというが、この歌は『鈴

屋集』並びに『石上稿』に収録されておらず、その詠出時期は不明である。

この一首の言うところは、吉野の山を踏み分けて眺めた桜花が恋しい。今、この桜の樹のもとに散り敷いた桜の花びらを集めて、あの時に見たような吉野の山を作りたいものだ、と言ったところであろう。管見に従えば、散り敷いた桜の花びらを使って、桜の咲き誇る吉野山を再現したいという願望を詠んだ和歌は、『万葉集』及び二十一代集には見られない。ただし、吉野山の散り敷いた桜の花びらが風に舞い上げられて、吉野山が再び花が咲いたようになった光景を詠んだ和歌が、『千載和歌集』に掲載されている。その歌を左に引く。

花の歌とてよめる　　俊恵法師

みよしのの山した風やはらふらむこずゑにかへる花のしら雪

（『千載和歌集』巻第二春歌下、九三）

この歌には宣長の「ふみ分けし」の歌で使われている「みよしのの」と「花の白雪」も使われている。散り敷いた桜の花びらによって、吉野山に再び桜の花を装わせる趣向と、両者に共通する言葉――「みよしのの」と「花の白雪」――があることから見て、宣長の「ふみ分けし」の一首は、『千載和歌集』に載る俊恵法師の「みよしのの」の一首を踏まえて作られた作品ではないか、ということが考えられてよいだろう。

さて、巻名の「花の雪」であるが、その用例を『万葉集』及び二十一代集に求めるならば、左記の二例を挙げることができる。

閑居の心を　　入道前太政大臣

花の雪この葉時雨のいくとせを身はふる郷の庭にみるらん

（『玉葉和歌集』巻第十六雑歌三、三二四八）

花のころ北山に御幸あるべかりけるを、とどまらせ給ひて、次の日つかはせ給ひける　　伏見院御歌

たのめこし昨日のさくらふりぬともとはばやあすの雪の木のもと

御返し　　後西園寺入道前太政大臣

花の雪あすをまたずたのめおきしそのことのはの跡もなければ

（『風雅和歌集』巻第三春歌下、一二五二・二五三）

このように「花の雪」という言葉は、勅撰集に二つの用例がある。しかし、右に掲げた用例はともに、宣長の「ふみ分けし」の歌との関係性が積極的に認められるものではない。ゆえに、巻名の「花の雪」も前掲の『千載和歌集』収載の俊恵法師の歌の結句「花の白雪」に求めるのが適当ではないだろうか、と私は考えている。

最後に、宣長は「花の雪」の末尾に「雪の山つくられし事は物に見えたり」と記されているが、ここは佐竹明広氏が指摘する通り[①]、その典拠として『枕草子』の「職の御曹司におはします頃」、『源氏物語』の「朝顔」、『大弐高遠集』、『師大納言母集』などが挙げられ

るであろう。

10　巻十「山菅」

『玉勝間』全五編（十四巻目録一巻）は、寛政七年（一七九五）六月にその第一編（巻一～三）が刊行され、その後、同九年（一七九七）十二月に第二編（巻四～六）が、同十一年（一七九九）九月には第三編（巻七～九）が出版されている。ここまでが宣長生前の刊行である。その後、第四編（巻十～十二）が享和四年（一八〇四）二月に、第五編（巻十三～目録）が文化九年（一八一二）一月に刊行されている。

このように『玉勝間』の刊行は、宣長の生前と歿後とに渡る。ただし、その草稿はすべて宣長生前に成立し、その板下も巻十四第十四丁まで宣長によって書かれている。

『玉勝間』巻十の巻頭言「山菅」は、次のように記されている。

山菅　十

はてもなしいふべきことはいへど〳〵なほやますげのみだれあひつゝ

此野べのすさびよ、いとかくはかなき手ならひを、もの〳〵しく、巻ごとに名つけて、歌をさへにそへたるは、我ながらだに、あやしくおぼゆるを、おのづからも見む人は、ましていかにこと〳〵しと思ふらん、さるははじめの巻のはしに、ゆくりかに歌ひとつ物して、巻の名つけつるまゝに、つぎ〳〵も一つ二つしかせしが、おのづからならひになりて、かならずさらではえあらぬわざのごとなりもてきぬるを、今さらにたがへむも、さすがにて、例のごと物するになむ、そもそのをり〳〵、思ひうるまゝに、よみいでもし、あるは他事（コトコト）によみたるがあるをも、とりいでなどするを、につかはしくおぼゆるも、なきをりなど、今かゝむとすとては、筆とりながら、思ひめぐらすに、例の口のおそさは、とみにもいでこで、しりくはへがちなるを、あぢきなく物ぐるほしきわざになん、此山菅も、からうじてほりいでたる、さる歌のきたなげさよ、

右の文章の冒頭の「此野べのすさび」は、『玉勝間』巻一の巻頭に置かれた「言草のすゞろにたまる玉がつまつみてこゝろを野べのすさびに」に対応するもので、宣長が書いた随筆の数々、すなわち『玉勝間』を指す。すなわち、宣長は巻十「山菅」の文章の冒頭で、再び巻一の巻頭言「初若菜」へと話題を戻そうとするのである。そして、『玉勝間』の巻ごとに巻名を付けて、和歌一首まで置いたことは、巻一に何気なくそうしたことがきっかけで、その後も一つ二つそうしたのが、自然と習慣になって、必ずそうしなければならないようになってしまったのを、今更そのやり方を変更するのも困るので、この巻十も例の通りに巻名をつけたまでである。これまでの巻頭に置いた和歌はその折々に詠んだものもあり、また、それまでに別のところで詠んだ和歌を取り出して、ここに載せたものもある。本巻（巻十）の「はてもなし」の和歌はやっとのことで作り出した

歌であり、その出来栄えも恥かしいかぎりである、と宣長は記している。

「山菅」の巻頭に置かれた「はてもなし」の一首の大意は、山菅の根が乱れて合うように、私が言うべきことはどれだけ言っても限りがないといったところであろう。この一首は古歌を踏まえて詠まれた作品ではなく、当時の彼の心情を素直に歌い上げた歌である。宣長は『玉勝間』巻一「初若菜」で自らの随筆（『玉勝間』）への思いを述べたが、その後の巻二から巻九の巻頭言では『玉勝間』への言及はなく、例えば、巻二「桜の落葉」では『枕草子春曙抄』を踏まえて庭桜を詠み、巻六「からあゐ」では『万葉集』に見る「からあゐ」の考証を行ない、巻八「萩の下葉」では助詞「は」を重ねて作った和歌を披露している。巻十「山菅」はこうした傾向とは明らかに違う。巻十「山菅」は巻一「初若菜」で述べたことを再度繰り返しており、それは佐竹明広氏が指摘する通り「『玉勝間』継続の宣言」[2]というべきものである。宣長が「『玉勝間』継続の宣言」をした巻十「山菅」は、『玉勝間』第四編第一冊にあたる。この第四編は宣長歿後の享和四年（一八〇四）二月に刊行された。宣長の歿後に刊行された『玉勝間』巻十「山菅」の巻頭言を読んだ読者は、その三年前に死去した宣長の「『玉勝間』継続の宣言」を奇しくも目にしたのである。この「山菅」の和歌と文章は、宣長の学問に私淑していた鈴屋門人などにとっては頼もしく、心強く響いたことであろう。

上述の通り、現在知られている『玉勝間』は、全五編十五巻（目録一巻を含む）であるが、寛政十年十二月八日付で、宣長が鈴屋門人の荻原元克に宛てた書簡には、「玉勝間ハ、追々三四五六篇迄も書申候、追々板行致候心掛ニ御坐候」と記されている。宣長は門人の元克に対して、『玉勝間』はその第六編まで執筆し、追々それらを出版する計画であるとの抱負を述べているのである。

元克に知らせたこの計画はしかし、果たされることはなかった。宣長は『玉勝間』巻十四第十四丁までの版下を浄書して、享和元年（一八〇一）九月二十九日にこの世を去ったのである。宣長歿後の『玉勝間』の編集経緯については、『玉勝間』収載の本居万麻呂の跋文に、次のように記されている。万麻呂は本居大平の長男、健正のこと。健正は宣長の孫にあたる。

わがおほぢ、此ものせられたる玉かつまは、わかきほどよりよまれける書の中に、心とまれるふし〴〵など、物にうつしとめられけるどもの、いたづらにくたしはつべきならぬ言くさをもととして、又なにくれの事にふれて、見もしきゝもしたるが中に、とあるはかゝり、しかいふことはかくこそなど、もとよりまめ〴〵しきやまと心にかけて、思ひよられけるすぢも、又たゞなにとなきすゞろごとどもも、かくかきあつめて、おなじ心にいにしへしのぶ人のよみ見む事を思はれけるなりけり、初若菜より思ひ草の巻までは、みづから清く書おかれけるを、はての巻つら〴〵椿になりて、十五のひらよりかきさして、いまだ下かきのまゝにてありつるを、翁うせられてのちうつしつぎて、十四巻としたるに、この書の巻々のをち〴〵書ついでて、

そこかしこたづねみむ人のたよりよからむさまにて、又一巻となしぬ、はじめの三巻は寛政六年すりまきなりぬるを、其つぎ〳〵も三巻づゝ板にゑらせて、此度にて五たび、あはせて十五まきにぞなれりける、

文化八年十二月八日　本居万麻呂

この跋文にあるとおり、『玉勝間』巻一「初若菜」から巻十四「つら〳〵椿」の第十四丁までは宣長がその浄書を担当した。そして、宣長の死後、彼の孫にあたる健正（万麻呂）が巻十四第十五丁以降は宣長の下書きを建正が編纂し、そして、『玉勝間』を読む人にとって便りよきようにと目録一巻一冊を添えて、その第五編としたのである。

宣長が萩原元克に宛てた書簡に記されている通り、宣長は確かに『玉勝間』第五編以降、具体的にはその第六編までの執筆・刊行を考えていた。今、『玉勝間』が全六編十八巻であると仮定した場合、その前半部は第一編から第三編（巻一から巻九）、後半部は第四編から第六編（巻十から巻十八）となる。すなわち、本章で考察している巻十「山菅」はその後半部の巻頭ということになるのである。巻一「初若菜」と巻十「山菅」がともに、『玉勝間』の巻頭言の様式を規定する内容であるという一致は、宣長が『玉勝間』を全六編として考えていたことの表れの一つと見ることができないだろうか。宣長が『玉勝間』の第六篇を予定していたことは、前述の通り、寛政十年十二月八日付で宣長が鈴屋門人の荻原元克に宛てた書簡に記されていることからも知られるが、それはまた、『玉勝間』巻十の巻頭言、「山菅」の内容とその配置からも窺い知ることができるのである。

11　巻十一「さねかづら」

さねかづら　十一

こぬものを思ひたえなでさねかづらまつもくるしやくるゝ、夜ごとに

これは夜毎にまつといふ、題よみのなるを、巻の名つけむとて、例のひきいでたるになん、

「こぬものを」の一首は「夜毎にまつ」という題で詠まれたものである、と宣長は記している。この題はしかし、管見に従えば、勅撰集では見られない。試みに『類題和歌集』を見ると、「夜毎にまつ」という題はなく、それと似た題に「連夜待恋」があるが、こちらは題のみで和歌は掲出されていない[3]。また、『題林愚抄』を見てみると、「夜毎にまつ」という題はなく、「連夜待恋」の項目には、左記の源孝明の和歌一首が記載されている。

連夜待恋　　源孝明　新拾

はかなしやくるるよごとの偽りにいつまでこりぬ心なるらん

（『題林愚抄』恋部一、六七〇二）

この他に宣長の身近にあったであろう歌集では、頓阿『草庵集』に「連夜待恋」と題する左記の一首が掲載されている。

御子左大納言家五首に　連夜待恋

一夜に憂きいつはりは知らるるを何をたのみにたえて待つらん④

（『草庵集』恋歌上、九七二）

このように「夜毎にまつ」という題は、勅撰集をはじめとして管見の及ぶ範囲では見出すことができなかった。また、宣長の歌稿である『石上稿』にも「夜毎にまつ」という題で詠まれた歌は記載されておらず、宣長が『玉勝間』巻十一の巻頭言で読んだ「こぬものを」の歌も『石上稿』には収録されていない。更に、「夜毎にまつ」に似た題である「連夜待恋」も前掲の源孝明と頓阿の歌しか見出すことができなかった。ゆえに、題詠という視点から宣長の「こぬものを」の一首を考察するには限界があると言わざるを得ない。

そこで歌意の視点から宣長の「こぬものを」の歌を考察してみたい。この歌の大意は、来ない人を思いきることができなくて、日が暮れて夜が来るたびに待ち焦がれて苦しんでいる、といったところである。ここでの「さねかづら」は第四句の「くるし」（苦し）と結句の「くる、」（暮る）を導き出すための枕詞として機能しており、歌意に直接に影響を及ぼすものではない。

この歌意に近い和歌を勅撰集に求めるならば、左に掲げる『古今和歌集』収載の素性法師の一首を掲出することができるであろう。

題しらず　　素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をたのむくるる夜ごとに

（『古今和歌集』巻第十三恋歌二、五五五）

素性法師の歌の大意は、秋風が身に染みて寒く感じられるので、日が暮れて夜になるたびに、つれないあの人でも訪れてくれるのではないだろうかと期待してしまうことよ、といったところである。この歌は「題しらず」とあるが、「夜毎にまつ」という題であっても不自然ではない。また、結句が「くる、夜ごとに」とあることも、宣長の歌と素性法師の歌は共通している。ゆえに、宣長の「こぬものを」の歌は前掲の素性法師の一首を踏まえて作られた可能性を考えてよいのではないだろうか。そして、その上で宣長は、素性法師の和歌の結句「くるる夜ごとに」にの「くるる」から逆算して、「くるる」を導き出す枕詞として「さねかづら」を一首の中に詠み込んだのではないだろうか。「さねかづら」は『万葉集』をはじめとして、上代中古に歌集にしばしば詠まれるモチーフであるが、管見に従えば、『万葉集』及び二十一代集の中で、「夜毎にまつ」という題で「さねかづら」を詠んだ和歌はないようである。宣長は素性法師の「秋風の」の一首の歌意を下敷きにして、そこに「さねかづら」を組み合わせることで、「夜毎にまつ」という題に応えたのではなかったろうか。

12　巻十二「山ぶき」

山ぶき　十二

われとひとしき人しなければ、といひける人も有けれど、よしやさばれおのれは、

思ふことといはではやまじやまぶきもさればぞ花の露けかるらむ

宣長は「われとひとしき人しなければ」とだけ記しているが、これが『伊勢物語』第百二十四段を指していることは明らかである。『伊勢物語』第百二十四段には、次のようにある。

むかし、おとこ、いかなりける事を思ひけるおりにかよめる。

思ふことといはでぞたゞにやみぬべき我とひとしき人しなければ[5]

右の「思ふこと」の一首の大意は、心に思っていることは、誰にも言わずに心の中にしまっておこう、私と同じ心の人などいないのだから、といったところであろう。『伊勢物語』は在原業平と思しき一人の貴公子の一代記という体裁で記された歌物語で、全百二十五段から成る。前掲の百二十四段は最後から二段目にあたる。この章段について、秋山虔氏は次のように述べている。

数々の話柄を連綴してきた、この歌物語は、ゆるやかながら一人の男の一代記という体裁であった。二〇八番歌（前掲の「思うこと」の一首、膽吹注）は、次段においてその人生の終焉を迎えようとする男の、いつわらざる感慨であろう。男にとって歌は自他の心情的連帯を獲得しようとするよすがであるとともに、一方ではそのことの断念を自覚させられるはかない営みでもあったに違いない。所詮、人間は孤独であり、それぞれの心を生きるほかないのだという諦念が抱かれるのだが、にもかかわらず、その諦念を歌にうたいあげることになったのは、やはり歌によりすがるほか生きられぬ男だったことになる。[6]

人生の終焉を迎えようとする「むかし、おとこ」は、人間の孤独を知り、諦念を抱きながらも、その諦念を和歌に歌い上げることでしか生きられない男であった。宣長もその生涯を通じて多くの和歌を詠んだ人である。彼が詠んだ和歌の文学的評価はさておき、彼がその生涯を通じて飽くことなく和歌を詠み続けた行為は、「むかし、おとこ」に通じるところがあると言えるだろう。

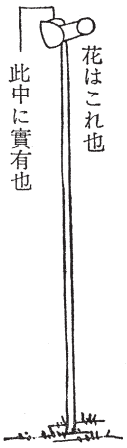
宣長が「山ぶき」を書いた年月日を特定することはできないが、六十歳代の著作と見てよいであろう。老いを迎えた宣長は、老いを迎えた「むかし、おとこ」のように和歌を詠み続けていた。「むかし、おとこ」は私と同じ心の人などいないのだから、心に思っていることは、誰にも言わずに心の中にしまっておこう、と詠んだ。しかし、宣長は「よしやさばれおのれは」（たとえそうであっても私は）と断った後で、「思ふことといはではやまじ」の一首を詠んでいる。

宣長の一首の大意は、思うことを言わないではいられない、そういう性格の私だから、山吹の花が露に濡れるように、私もずいぶん涙で袖が濡れるような思いをしたことがあります、といったところである。言わずにはいられない自分の性格と山吹の花とを配した一首である。この歌の初句・第二句「思ふことといはではやまじ」が、前掲の『伊勢物語』の「思ふことといはでぞたゞに」を踏まえて詠まれていることは繰り返すまでもない。この「思ふことといはではやまじ」がこの歌の中心であって、第三句の「やまぶきの」は、その直前の「やまじ」（止まじ）を言わんがために同音（やま）を繰り返したものである。

宣長は「山ぶき」の冒頭に『伊勢物語』第百二十四段の「われとひとしき人しなければ」を掲げることで、一生を通じて和歌を詠み続けた「むかし、おとこ」を読者に提示した。当時の国学者あるいは歌人であれば、この一節だけで「むかし、おとこ」の諦念を想起できたのではないだろうか。そして、宣長はその「むかし、おとこ」の諦念を覆すように「よしやさばれおのれは」と転じ、「思ふことといはではやまじ」と歌い上げた。そこには歌人として、そして国学者として、自らの和歌（文学）と学説（研究）とを世に送り続けようとする宣長の姿勢を読み取ることができるようである。

13　巻十三「おもひ草」

おもひ草　十三



末ひろくしげりけるかな思ひ草を花が本は一もとにしてかくよめるこゝろは、恋の歌につねに、尾花がもとの思ひ草とよむなるは、そのはじめを尋ぬれば、万葉集の十の巻に、「道のべのをばなが本の思草、今さらに何物か思はむ、といへる歌たゞ一ツあるのみにて、これをおきては見えぬ事なるを、此一本によりてなむ、後にはひろくよむこととなれるよしをよめるにぞ有ける、そも〳〵此思ひ草といふ草は、いかなる草にか、さだかなるぬを、一とせ尾張の名兒屋の、田中道麻呂（ノ）が許より、文のたよりに、今の世にも、思ひ草といひて、すゝきの中に生る、小き草なむあるを、高さ三四寸、あるは五六寸ばかりにて、秋の末に花さくを、其色紫の黒みたるにて、うち見たるは、菫（スミレ）の花に似て、すみれのごと、色のにほひはなし、花さくころは、葉はなし、此草薄（スヽキ）の中ならでは、ほかに生ず、花のはしつかたなる所の中に、黒大豆ばかりの大（キ）さなる実のあるを、とりてまけば、よく生る也、されどそれも、薄の下ならでは、まけども植れども、生ることなし、古（へ）の思ひ草も、これにやあらむ、されどすゝきの中にのみ生るから、近き世の事好むものの、おしてそれと名づけたるにもあらむかといひて、其草の図（カタ）をも書て、見せにおこせたる、そのかたは、かくぞ有ける、

其後に又あるとき、花の咲たるころ、一もとほりて、薄のきりくひごめに、竹の筒の中にうゑて、たゞに其草をも、見せにおこせたるを、うつしうゑて見けるに、しばしは生（オイ）つきたるさまにて有しを、ほどなく冬枯にける、又のとしの春、もえや出ると、まちけるに、つひにかれて、薄ながらに芽も出ずなりにきかし、さるは後にたづね見れば、此わたりの野山なる、すゝきの中にも、ある草にぞ有ける、これ古（ヘ）の思草ならむことはしも、げにいとおほつかなくなむ、

今の世の恋の歌に「尾花がもとの思ひ草」と詠むことがあるが、その起源を遡ると『万葉集』巻第十秋相聞に「寄草」という題で詠まれた「道之辺乎花我下之思草今更尓何物可将念（みちのべのおばながもとのおもひくさいまさらなにのものかおもはむ）」に至る。「尾花がもとの思ひ草」という表現は、この「道之辺（みちのべ）」の一首から始まって、後の世に広く詠まれるようになったのである。以上が宣長の「末ひろく」の歌の大意である。

巻名である「おもひ草」について宣長は、「そも〳〵此思ひ草といふ草は、いかなる草にかさだかならぬを」と記している。宣長は「思ひ草」が具体的にどの品種の植物であるか断定できずにいると断ったうえで、鈴屋門人、田中道麿からの書簡の紹介へと話題を移す。

宣長のもとに、或る年、名古屋に住む鈴屋門人、田中道麿から寄せられた手紙の中で「思ひ草」に関する見解が記されてあった。道麿について宣長は『玉勝間』巻一「おかしとをかしと二つある事」に、

此道まろといひしは、美濃國多芸郡（ノ）榛木（ハリノキ）村の人にて、後は名兒屋に住て、またなくふることを好み、人にも教へて、ことに万葉集を深く考へ得たる人になむ有ける、年はやゝこのかみなりしかども、宣長が弟子（ヲシヘノコ）になりて、二たび三たびはこゝにも来（キ）、つねはしば〳〵ふみかよはしてなむ有けるを、今はむかしの人になむなりぬる、大かたかの名兒屋に、いにしへ学びする人々の出来しは、此おきながみちびきよりぞはじまりける、

と記している。この文章のとおり、道麿は美濃国の人で、後に名古屋桜天神社の社務を司った霊岳院に住持して古学を講義し、その門人は三百人を超えたと伝える。彼は安永六年（一七七七）に松坂に宣長を訪ね、以後、書簡による問答を重ねて、同九年（一七八〇）に鈴屋に入門した。道麿は鈴屋に於いて尾張からの初めての門人で、道麿歿後に彼の門人が鈴屋に入門するなど、尾張に鈴屋の学問が広がるきっかけとなった人である。[7] 道麿は天明四年（一七八四）に六十一歳で死去した人であるから、『玉勝間』巻十三が成稿した享和元年（一八〇一）八月九日は、[8] 道麿の逝去から数えて十七年目にあたる。

巻頭言の「おもひ草」は、宣長が故道麿との間で交わされた書簡をたよりに、それを引用する形式で書かれている。道麿からの書簡には、次のようにあったという。

今でも思い草といってススキの中に生える小さな花がある。それ

は高さ九～十二センチ、あるいは十五～十八センチで、秋の末に花を咲かせる。その花の色は黒味がかった紫色で、一見したところスミレの花に似ているが、スミレのようにつやはない。この花は花が咲くころは葉がなく、ススキの中でしか生えない。花の端に黒大豆ほどの実がなり、それを採って蒔くと芽が出るが、それもススキの中でしか生えない。昔の思い草もこれだろうか。あるいはススキの中にだけ生えるので、近頃の好事家が推量で名付けたのだろうか。

以上が道麿からの書簡の凡そであるが、この書簡には前掲のように「思ひ草」を描いた絵が添えられていた。『玉勝間』に掲載された道麿の文章（書簡）と絵とを併せて考えると、道麿が思い草ではないかと推測した植物は、現在ではナンバンギセルという名前で呼ばれている植物であると考えられている。そして、道麿のこの推測は現在では一般的に認められているようである[9]。

「おもひ草」に拠ると、道麿からはその後、花の咲いたころに、一株掘って、薄の切株ごと竹筒に入れて、宣長に届けたという。宣長はそれを植えてみたが、ほどなくして枯れてしまった。翌春、そこから再び芽が生えるかと待ってみたが、ついに枯れてしまったという。宣長はその後、道麿から届けられた思い草が松坂近郊の野山にもあることを知ったが、それが昔の思い草であろうことは、実に頼りないものだ、と疑問を述べている。

さて、『玉勝間』巻十三の「おもひ草」に紹介された道麿の書簡であるが、それは道麿と宣長との間で『万葉集』について交わされた質疑応答を記した『万葉問聞抄』に記録されている。『万葉問聞抄』は道麿からの疑問に宣長が応答する形式で記されており、その成立は安永七年（一七七八）ごろと推定されている[10]。安永七年は道麿が五十五歳、宣長が四十九歳の年にあたる。『万葉問聞抄』上巻からその記事を左に引用する。

道辺之ヲ花ガモトノ思草今更ニナド（五問ノ）〔二二七〇〕と江点、もし今更ニナニと訓ん方宜からんか、示給（是よろし）へ、

右オモヒクサてふ物、今も思草といひて薄の中に生る物あり、高さ三四寸、花の色紫にて秋の末に花さく、花さく時は紫はなし、薄の中にならて外に咲もせす、打見たる形はすみれに似て、すみれのことくつや〳〵としたる紫にはあらす、紫なる色の上薄薄墨ぬりたることきの、黒めなる紫色也、すゝきの中に生るを見て、さかしらに思草と云初しにや、又只誠にさる名の草にや、計かたし、薄の中に生たる形、根の所甚危くて外へうつして植んこともなりかたけに見ゆる物也、去秋初て見侍りし本丸といふ男、その実を吾家にうゑおきしか、此春いまた生す、扨その有処は名護屋の一里ほと東なるオソヘテといふ所の人の家なる薄の中に咲、また甚兵衛の新田といふ所の川端の薄の中に余多咲也、甚兵衛新田は名護屋より坤に当りて二里ほど有、本丸がたま〳〵魚釣にゆく所也、定て其草此頃（ころ）か夏（より）へかけて葉あるへし、此こと本丸にいふて当年中に葉も見おきたく思ふ也、凡て春夏葉有て初秋に葉枯て花さく物多し、曼珠沙花、夏水仙、花の時に葉なし、

思草の事始てうけ給り珍重也、但御考のごとく後世の好事の者のおして名つけたるもはかりかたし、又古の真の思草ならんもはかりかたし、此方にても吟味致し、土民まであまねく思草といいはは、真にても有へし、

右の記事と『玉勝間』の「おもひ草」の文章を照らし合わせてみると、右の記事が「おもひ草」に紹介されている道麿の書簡にあたることが知られるであろう。宣長は十七年前の故道麿との質疑応答を思い起こしながら、この掌編（「おもひ草」）を書いたのである。

宣長は「おもひ草」のはじめに「末ひろく」の一首を置き、そこで「尾花がもとの思ひ草」という表現は、『万葉集』には「道之辺（みちのべの）乎花我下之（おばながもとのおもひくさいまさらなにのものかおもはむ）思草今更尓何物可将念」の一首しかなかったが、その一種が起源となって、後世には広く詠まれるようになったことを詠んでいる。

今、この歌意に道麿の姿を重ねてみたい。道麿は尾張国から宣長に入門した最初の門人である。その道麿歿後に彼の門人であった大舘高門（天明四年〔一七八四〕入門）や加藤磯足（寛政元年〔一七八九〕入門）などが相次いで鈴屋に入門した。そして、更に磯足や高門などを通じて宣長の学問が尾張国に広がっていった。すなわち、『万葉集』巻第十収載「道之辺（みちのべの）」の歌が詠まれて、それ以後、恋の歌に「尾花がもとのおもひ草」と広く詠まれるようになったように、田中道麿が鈴屋に入門し、それ以後、尾張国に鈴屋の学問が広がっていったのである。『玉勝間』巻十三「おもひ草」は、『万葉集』に詠まれた「思ひ草」に関する聞書きと考証とを記した随筆であるが、そこには「思ひ草」に仮託して語られた、鈴屋に於ける道麿の功績を讃える宣長の謝辞を読み取ることができるのではないだろうか。

14　巻十四「つら〳〵椿」

つら〳〵椿　十四

万葉集の一の巻に、巨勢山のつら〳〵椿つら〳〵に、といふ歌をおもひ出て、われもよめるは、

世の中をつら〳〵つばきつら〳〵に思へばおもふことぞおほかる

さるはわがみのうへのうれへにもあらず、なべての世のたゝずまひ、人のありさまの、よきあしき事につけて、おふけなく思ふすぢの、心にこめがたきは、をり〳〵此巻々にも、もらせるふしもおほかれど、猶いひても〳〵、つきすべくもあらずなむ、

宣長は『万葉集』巻一に載る坂門人足の一首を思い出して「世の中を」の一首を詠んだと記している。一足の歌は、次の如くである。

大宝元年辛丑秋九月太上天皇幸
于紀伊国時歌
巨勢山乃列列椿都良都良尓見乍思奈許湍乃春野乎（コセヤマノツラツラツバキツラツラニミツツオモフナコセノハルノヲ）
右一首坂門人足

（『万葉集』巻第一雑歌、五四）

人足のこの歌は、大宝元年（七〇一）秋九月に、持統天皇（太上天皇）が紀伊国に行幸なされた時に詠まれた作品である。その大意は、巨勢山の一面に葉が茂り連なっている椿、それをつらつらしみじみ見ながら偲ぼうよ、巨勢の春の野を、といったところであろう。第二句・第三句での「つら〳〵」の音の繰り返しが印象的な作品である。

宣長も「世の中を」の歌で、一足のこの歌の第二句・第三句をそのまま借用している。「世の中を」のいうところは、世の中をつくづくと思えば、椿が連なり繁れるように、思うことが多いものだ、となるであろう。ここでの「つら〳〵椿」はしかし、人足の歌が実景であったのとは異なり、思いの多さを表すための比喩として用いられている。

宣長は「世の中を」の歌の後に続けて、「さるはわがみのうへ」以下に於いて、この歌は我が身の悲しみを詠んだものではない。一般の世の中の様子、人間の有様、善いこと・悪いことにつけて、心にしまっておけないものを、この本（『玉勝間』）にも書いてきたが、それでもなお尽きそうにもない、と記している。

巻十四の巻頭言「つら〳〵椿」について、佐竹明広氏は「継続への固い決意を示したもの」と見る[11]。確かに宣長はそう考えていたようである。本稿第十章で論じた通り、寛政十年十二月八日付で、宣長が鈴屋門人の荻原元克に宛てた書簡には、「玉勝間ハ、追々三四五六篇迄も書申候、追々板行致候心掛ニ御坐候」と記されており、この記事から宣長が『玉勝間』の第六編までを執筆し、追々それらを出版する計画であったことが知られるのである。「つら〳〵椿」で「思へばおもふことぞおほかる」と詠み上げた宣長は、その文章の末尾でも「猶いひても〳〵、つきすべくもあらずなむ」とその心境を吐露している。しかし、実際は『玉勝間』はその第五編第十四巻を以ってその本文は閉じられている。

15 『玉勝間』の巻頭言

『玉勝間』は随筆集であるから、一般論として、読者はどの章段から読んでもよいはずである。巻頭言から読み始めてもよいし、気になった章段だけを選択して読んでも構わない。そして、巻頭言はパラテクストであるから[12]、その機能に注意する読者はそれを読み、それに留意しない読者はそれを無視あるいは軽視するだろう。しかし、これを作者の立場から見るならば、作者は何らかの意図をもって巻頭言を記しているはずである。『玉勝間』では十四巻すべてに巻頭言が置かれ、かつ、そこには宣長自作の和歌一首と文章を置き、そして、その和歌に因んだ草花を巻名として名付けるという、かなり手の込んだ仕掛けが施されている。宣長は『玉勝間』の巻頭言に何らかの機能を持たせようとして、こうした仕掛けを工夫したのではないだろうか。

それでは、宣長は『玉勝間』の巻頭言に、具体的にどのような機

能を持たせようとしたのであろうか。

まず、宣長は巻頭言で自作の和歌一首を置き、そしてその和歌に因んだ野辺の草花を巻名として名付けている。これを『玉勝間』全体で見るならば、綺麗な竹籠（書名である『玉勝間』）に、摘み取られた十四種類の四季折々の草花が溢れているイメージが映し出されるであろう。こうしたイメージは、学者の随筆集に付き纏いがちな厳めしい印象を、幾分かでも和らげる効果が期待されるであろう。なお、『玉勝間』の巻名に記された草花は、「そもそのをり〳〵、思ひうるまゝに、よみいでし」（巻十「山菅」）ものであり、その配列もまた、そこに何らかの規則性――例えば、四季の順に並べたり、四季のバランスを考慮したり、或いは『枕草子』の「木の花は」、同書「草の花は」に基づいて草花を選択し配列するなど――を見出すことはできない。

次に、本稿に於ける考察の結果、『玉勝間』の巻頭言は、それぞれ程度の差はあるが、すべて上代中古の文学との関係性有することが明らかになった。ここいう関係性とは、具体的には次の三点である。

（ア）巻名に記された十四種の草花は、すべて上代中古の歌集に詠まれた植物であり、国学に興味関心を抱く読者であれば、その巻名からそれぞれの草花をモチーフとした古歌を想起することができたであろう。なお、『玉勝間』巻六「花のさだめ」で、宣長は草花の品評を述べている。その末尾に「又いまやうの、よの人のもてはやすめる花どもも、よにおほかるを、かぞへいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にもよみたらず、ふるき物にも、見えたることなきは、心のなしにや、なつかしからずおぼゆかし」とある。これは『玉勝間』の巻頭言で取り上げた草花について直接に言及した文章ではないが、宣長が草花に関して、古書古歌に見えるものを好しとした傾向が知られる記事である。

（イ）巻頭言で詠まれた宣長自作の十四首の和歌のうち、古歌（『万葉集』や勅撰集など）を踏まえて詠まれたと考えられる歌が、その半数の七首――巻六「からあゐ」、巻七「ふぢなみ」、巻八「萩の下葉」、巻九「花の雪」、巻十一「さねかづら」、巻十二「山ぶき」、巻十四「つら〳〵椿」――ある。

（ウ）巻二「桜の落葉」は、その文章全体が『枕草子春曙抄』巻九「風は」を踏まえて作られており、巻十二「山ぶき」は『伊勢物語』第百二十四段を踏まえて作られている。

もちろん、その中には巻四「わすれ草」のように古典文学とは直接の関係をもたずに、宣長の心情が綴られた随筆もある。しかし、この場合でも、巻名である「わすれ草」は、上代中古の文学作品にしばしば登場する植物である。すなわち、『玉勝間』全十四巻の巻頭言を全体として俯瞰するならば、それは上代中古の文学との関係性を有した作品であるといってよいだろう。

本居万麻呂（健正）が『玉勝間』の跋文で「おなじ心にいにしへしのぶ人のよみ見む事を思はれけるなりけり」と記しているように、

宣長は『玉勝間』の主たる読者として、「おなじ心にいにしへしのぶ人」を想定していたのではなかったろうか。「おなじ心にいにしへしのぶ人」とは、宣長と同じく国学を学ぶ人のことである。国学を学ぶ人であれば、和歌を詠み、上代中古の文学に興味関心を抱き、それに関する知識もある程度は有していたであろう。そうした読者が、巻頭言に記された宣長自作の和歌と文章を読み、その背景に見える上代中古の文学作品までも想起できれば、彼らは国学の世界――宣長学の世界――へと更に一歩足を踏み入れることになる。

『玉勝間』の巻頭言を通して、上代中古の文学作品を連想することは、国学を学ぶ人であればそれほど難しいことではなかったであろう、と私は考える。しかし、もしそれが困難であって、例えば、巻二「桜の落葉」から『枕草子春曙抄』巻九「風は」が連想されなくても、また、巻十二「山ぶき」から『伊勢物語』第百二十四段を想起できなくても、桜や山吹を詠んだ古歌の一首でも思い浮かべることができれば、宣長はそれで可としたのではなかったろうか。宣長は巻六「からあゐ」で自作の和歌を詠んだ後に、

寄草恋といふ題にてよめるなり、古今集なる、

我恋をしのびかねてばあしびきの山橘の色に出ぬべし

といふ歌にぞよくにたると、又いふ人ありなんか、

と記している。ここでの宣長は、自作の和歌が『古今集』の「我恋を」の一首と関係があるという人がいるかもしれないと記すことで、読者に宣長自作の和歌を読み解くための手掛かりを提示している。そこには、読者（国学を志す人たち）へ向けられた宣長の優しい眼差しが見て取れるであろう。

宣長が『玉勝間』を書いた意図について、佐竹明広氏はこの随筆集全体に冠するかたちで詠まれた「言草の」の一首に関する解釈の中で、次のように述べている。

だが、『玉勝間』は違う。「なにくれと数おほくつもりぬる」言草を、「やりすてむもさすがにて、かきあつめむとする」（玉勝間一ノ序）雑篇なのである。固い学問的著作の体裁を取らないという点は、気分的にも楽であるし、しかも、取捨選択、何を書いてもよいのだから楽しみも大きい。巻頭歌に歌われた「すさび」を、このような意味での「なぐさみごと」と解するならば、宣長が書こうとしている『玉勝間』の意図を取りはずす憂いは、おそらくない[13]。

佐竹氏が指摘する通り、宣長が『玉勝間』を書いた意図は「なぐさみごと」であったと見てよいだろう。本稿で考察した通り、宣長は『玉勝間』の巻頭言に於いて、摘み取られた十四種類の四季折々の野辺の草花が、綺麗な竹籠に溢れているイメージを作り出した。これによって、学者の随筆集に付き纏いがちな厳めしい印象を、幾分かでも和らげる効果が期待される。これも読者に対して、少しでもリラックスした気持ちで『玉勝間』を読んでほしい、という宣長の意図の現われと見てよいだろう。また、古歌に詠まれた野辺の草花をモチーフとした和歌と文章で構成された巻頭言は、読者を上

代中古の文学作品へ、そして国学の世界へと導く役割を果たしている。宣長は巻頭言に於いて出来るだけ学問的な体裁を避け、自作の和歌に文章を添えたスタイルを選択した。そして、時にはその本文中に自作の和歌の読解の手掛かりを記すなどして、読者が理解しやすいような配慮を示している。「なぐさみごと」という『玉勝間』の執筆意図は、『玉勝間』の巻頭言にも看取されるのである。そして、そこには少しでも多くの人々に、『玉勝間』を通して国学を知ってもらい、国学をさらに広めたいという宣長の願いを読み取ることができるのではないだろうか。

〈注〉

① 『本居宣長』、日本思想大系四十、岩波書店、昭和五十三年一月刊、二七八ページ。

② 注①、五五八ページ。

③ 日下幸男『類題和歌集』、和泉書院、平成二十二年十二月刊行参照。

④ 酒井茂幸他『草庵集・兼好法師集・浄弁集・慶運集』、和歌文学大系六十五、明治書院、平成十六年七月刊、一六一ページ

⑤ 堀内秀晃・秋山虔校注『竹取物語　伊勢物語』、新日本古典文学大系十七、岩波書店、平成九年一月刊、一九三ページ。

⑥ 同右。

⑦ 本居宣長記念館編『本居宣長研究事典』、東京堂出版、平成十三年十二月刊、一四五ページ参照。

⑧ 『本居宣長全集』別巻三収録「本居宣長年譜」、八八九ページ参照。

⑨ 小村昭雲『原色万葉植物図鑑』、桜楓社、昭和四十三年六月刊、二二八ページ。久保田淳『花のもの言う』、岩波現代文庫、一九四ページ参照。

⑩ 注⑦、七三ページ参照。

⑪ 注①、五五九ページ。

⑫ 筑摩書房版『本居宣長全集』第一巻収録の『玉勝間』には、各章段に通し番号が付されているが、巻頭言にはそれが付されていない。このことは『本居宣長全集』の編集者も筆者と同様に、巻頭言をパラテクストとして位置付けていることを示している。

⑬ 注①、五五七ページ。

〈付記〉

本稿に於ける宣長の著作の引用はすべて筑摩書房版『本居宣長全集』に拠った。また、『万葉集』と二十一代集、並びに『題林愚抄』からの引用は『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。